

18世紀前半の薩隅方言

田 尻 英 三

(1980年10月16日 受理)

The Satsugu Dialects in the First Half Eighteenth Century

Eizo TAJIRI

村山七郎氏により、ロシア語で書かれた18世紀前半の薩隅方言資料が『漂流民の言語』（吉川弘文館）（以下『漂流』と略称）の中に訳出されている。氏の解説をかいつまんで述べると次のようになる。

1728年（享保13）11月に、薩摩藩主松平大隅守（島津継豊）の命により、大阪に住む薩摩藩関係者に米や紙をとどけるために、ワカシワ丸（若潮丸か）が17名の乗組員を乗せて出帆した。しかし、暴風雨にあい、1729年6月にカムチャツカに漂着した。そこで、15名は射殺され、2名（ソーザとゴンザ）だけが助かり、1734年ペテルブルグに送られ、1736年から科学アカデミーでアンドレイ・ボグダーノフの指導のもとで、ロシア人子弟に日本語を教える事となった。ソーザは同年9月18日に没したが、ゴンザはボグダーノフの協力により6種の日本語教科書を著した。

- | | |
|-------------------------------------|------------------------|
| (1) 露日語彙集（アルファベット順，項目別）（以下、『露日』と略称） | 1736年 |
| (2) 日本語会話入門（以下、『会話』と略称） | 1736年 |
| (3) 簡略日本文法（以下、『文法』と略称） | 1738年 |
| (4) 新スラブ日本語辞典（以下、『スラブ』と略称） | 1736年9月29日～1738年10月27日 |
| (5) 友好会話手本集 | 1739年 |
| (6) Orbis pictus | 1739年 |

この、1717年に生まれ、1739年に没したゴンザの残した資料により、18世紀前半の薩隅方言の実態を知ることができるのである。

ここでいう薩隅方言とは、上村孝二氏のいう「南九州方言」¹⁾と同じ意味である。便宜的に通称に従った。

前掲のゴンザの著作の中で現在まで村山氏により翻訳されているものは、(1)『露日』の全文（『漂流』所収）、(2)『会話』の全文（『漂流』所収）、(3)『文法』の全文（『文学研究』66輯）、(4)『スラブ』の425項目（『文学研究』68輯）の4著作のみである。本稿は、これらの資料中から音韻の諸要素を主としてとりあげ、これらの文献の有効性を考察するものである。

主としてとりあつかう語彙は、『露日』の1233項目（その中12項目は、同語の表記上の差異だけ

によるものである。)と『スラヴ』の425項目である(『露日』と『スラヴ』の重複項目数は82である)。ここで項目数をあげたのは、前述の如く表記上の差異によるもの(例えば、ツキ《月》の *cuk'* と *cúk'* の両表記, ドケ《何処へ》の *dokè* と *dóke* の両表記²⁾, ツメ《爪》のツメ・ツメ両表記)が別項目として掲げられているが、細かな表記の区別が問題になるものもあり、各資料の量的比較のためにも、全体の語彙数としての標出項目数をあげる方が意味が有ると思われるためである。

また、原文はロシア字で書かれており、それを村山氏はローマ字と片仮名で転写して訳語をつけている。但し、『露日』・『会話』と『文法』・『スラブ』とでは片仮名転写の方式が違っている(例えば、『文法』と『スラヴ』とでは、無声化を○印で表示しない、語末の内破音のトをツと表記するなど)ため、とりあつかいに注意を要するが、ここでは特に問題となる以外は、片仮名で村山氏の資料通りの表記のまま引用する事にする。この問題については後であつかう。

村山氏は、『漂流』においてゴンザの言語の特徴を12項目あげ、柴田氏は『漂流』の書評中で更に4項目を追加している。また、村山氏は『スラブ』の解説文中に、音韻7項目・語彙分布2項目・外来語9項目・新語10項目を追加している。これらの中には項目名のみで用例をあげていないものもあるので、筆者の調査した用例を加え整理して以下に列記する(項目順は『漂流』に準じる)。また、標出の方言形と訳語との関連が不明瞭と思われるものについては、もとの語形として村山氏の注記に私案を加えて《 》で示す事にする。

(1) 音節シに続くラ行音が、タ行音に転化している(村山氏が指摘)。

シメタ(風), シタン(知らない), ファシタ(柱), カシタ(頭), シトカ(白い), シトカト(白い), シトミ タマゴン(卵のしろみ), シモバシタ(霜柱), シタガ(白髪)。

(2) テ・デがチェ・ヂェに転化している(村山氏が指摘)。

アサッチェ(明後日), バンマヂェ(晩まで), チェ(手), チェチェヤ(父)《父親》, チェデ(出納係)《手代》, チェガウヅク(手の痛風)《手が疼く》, チェゴ(編細工)《手籠》, チェカケント(完全な)《手かけないもの》, チェコブシ(拳), チェンネン(世捨人), チェンナウ(恵みをうける), チェナム(連れだつて)《連れ並む》, チェナマスル(連れて行く), チェノデ(徒党), チェノファラ(掌), チェヌキ(こて, 『スラヴ』では手袋と翻訳)《手ぬき》, チェップ(兵器)《鉄砲》, チェップンツムルシコ(弾薬筒, 装薬)《鉄砲の詰める量》, チェップノテ(武装兵)《鉄砲の隊》, チチヂェオヤカス(乳で育てる), ドシチェム(非常に)《どうしても》, デェクル(果物が熟する)《出来る》, デェクルコツ(熟すこと), デェケタツ(熟したる), フィダイノチェ(左手), フェヂェ ファシル(船で航海する), フチェコツ(扇動する)《ふといこと》, フチェコツユフト(扇動者), イチニチ フィガチェル(一日日が照る), イケンヂェム(どうしても)《いかにしても》, イッチェ(特に)《いと》, オモチェ(良い部屋)《表》, オモチェ(馬勒の上部)《ロシア語の確実な意味は不明とある》, オモチェ フェン³⁾(舳先)《舟の表》, ステェゴ(捨子), シタチェヤ(仕立屋), タマゴン ナミヂェ(半熟

卵)《卵の生茹》, タシヌヂェ (保存して)《たしなんで》。

チェップノテやフテ (額) の例を見ると, 連母音から変化した「テ」は口蓋化をおこさないようであるが, フチェコッ・チェナムの例からは oi・ue 連母音の変化形は口蓋化をおこしているのがわかる。

なお, 村山氏はイッチをイトと関連づける『大言海』の説を支持しているが, これはイッチの記載されている『スラヴ』の次の項目であるイッチョカッ・イッチコマカッ・イッチシェンショナシ・イッチイチバンなどの例からすると, イトに助詞「に」が接続縮合したものとみるべきかもしれない。逆に, 二重母音音節の変化形ではないのに, チェではなくテの形をしている例がある。(10) の e・ě の項参照。

テンマ (ボート)《伝馬》, テオイ (負傷)《手負い》, テラ (寺)

(3) 語や尾のリ・レの頭子音 r が脱落する傾向にある (村山氏が指摘)。

ファイ (針), フェエメ (宴会)《ふるまい, 『スラヴ』では同意の語としてフレメが記載されている》, グルイ (周囲), カナクサイ (鎖), キウイ (胡瓜), ケムイ (煙), アカイ (光)《明かり》, ニワトイ (鶏), トイツナ (手綱)《取り綱》, ボクイ (短靴), イカイ (錨), カサツクイ (帽子製造者), クスイ (薬), ナマイ (鉛)。

ダイ (誰), フェエ (腫れ), ワイエメ (割れ目), キエカ (綺麗)。

村山氏は『スラヴ』のイリ (ねじ錐) の項の注で, kif (霧), síř (臀), tsurbai (釣針) などの例がトイ (鳥), ヤイ (槍), アイ (蟻) の例のもう一方にあるとしている。これは r 子音の脱落ではなく, 母音の脱落であるとの説明なのであろうか。これは, 後述するように, 軟音符の有無によるイ列音ウ列音の無声化現象と深い関係を有するだけに, 氏が『文法』と『スラヴ』で母音の無声化を示す○印をつけなかった点は, 『漂流』で採られた片仮名の表記法に比べて劣るものと言わねばならない。ここでは, r 子音が脱落せず, 母音の無声化を示していると思われる用例の一部を列挙するにとどめる。

ファル (春), ファル (畑・耕地・野)《原》, フィル (昼) (にんにく), フィラダル (水差し), ファシル (走る), フォムル (褒める), フォリ (掘), ヨル (夜), クルマ (車), マズル (混ぜる), ネドコル (ベッド)《寝所》, ノリ (脳)《『会話』ではノイ》, オル (居る), ファル (張る), シリオ・シルオ (尾), シキリ (境界), タヌル (さがしもとめる)《尋ぬる》, トカギル (とかけ), トコル (所)

(4) 音節シは, 若干の語ではシュとしてあらわれる (村山氏が指摘)。

シュルシ (印), シュル (汁), オシユム (惜しむ)

シュフォニオツル (崩壊する) も《四方に落つる》の意と考えるならば, この例に入る。因みに, 「方」は中世より合音化しているので, 「ホ」の仮名には問題は無い。この現象は単にシ>シュというだけではなく, 次の各例と併せて理解すべきものである。なお, (19) も参照。

アキュンド (商人), チヂュミ (巻毛), チヂュミガミ (縮み髪), カリユド (捕鳥者)《狩

人)。

(5) 若干の語においては、語中尾のタ行カ行が濁音化している(村山氏が指摘)。

ファダケ⁴⁾(畑), フォドケ(神)《仏》, フォドケ カミノ イキ(聖霊なる神), フォドケ ムスコ(息子なる神), フォドケ トト(父なる神), ヌスド(盗人), イトゴ(従兄弟)。

(6) 語末音節の母音は弱まっているが、いわゆる「促音化」は見られない(村山氏が指摘)。この現象については、全用例が170例以上あり全てをあげるのは煩瑣なので、代表的な例だけをあげておく。また、語末のシ・ス・ジ・ズ・チ・ツ・ヂ・ヅについては、母音脱落か母音無声化かについて問題があるので、表記の問題と関連づけて後に詳しく述べる。

アクビ(あくび), ビキ(蛙), ドク(毒), アシ(足), ツブシ(膝), ツヅ(よだれ、『スラヴ』では唾と訳している), ファチ(鉢)(蜂)(皿)(八), フィヤク(百), イキ(息), フォンノコト(真に), フォシ(星), イビ(指), イビキ(いびき), イシ(石)(啞), クビ(首), ユメシ(夕飯), カブ(蕪), カル(刈る), キビス(くるぶし), キク(聞く)(嗅ぐ), コブ(蜘蛛), クツ(靴), クギ(釘), ミツ(水)(蜂蜜), ミチ(道), モチクル(持って来る), ムカシ(昔), ナツ(夏), ナル(成る), ネチョル(眠る), オビ(帯), オラブ(叫ぶ), サルク(歩く), スル(為る)。

言うまでもなく、語中では動詞の促音便やロッピーク(六百)の例のように、促音そのものは別の音韻として存在するのである。

この無声化の例の中には、ファル(春)(原)・オツル(落ちる)・ヌクモル(暖まる)・サル(猿)・トカギル(とかげ)の例も含んでいる。これらは例えば、嶋戸貞義著『鹿兒島方言辞典』(国書刊行会)(以下、『嶋戸』と略称)では、それぞれハイ・オツイ・ヌクモイ・サイ・トカギイとなっている。ここでは、無声化をあらわす符号が付されているかどうかという観点で一括してあつかうものとする。(3) 参照。

(7) 同様に、語末のミ・ムはまだ撥音化していなくて母音の無声化の段階であるが、語末のヌは撥音化している。

ナミ(波), ミミ(耳), ウミ(海), アミ(網), チヂュミガミ(縮み髪), ファサミ(鉢), ゴミ(塵埃), カザム(嗅ぐ), キイエスミ(木炭片), コヅミ(堆積), クラスミ(暗黒), モミ(縦), ネツウミ(鼠), カガミ(鏡), ノム(飲む)。

イン(犬), ヤマン(狼)《山犬》

また、語中ではあるが、涙も現在のようにナンダではなくナミダとなっている。

村山氏は、『スラヴ』で逆接の接続助詞ドモがドンになっていく過程を示すというドムの表記がみられるとの指摘があるが、同様の例として、ノム(蚤)を加えておく。

(8) 形容詞はカ語尾とイ語尾の併用である(村山氏が指摘)。

『漂流』では、カ語尾形容詞は附加語的・述語的に用いられ、イ語尾形容詞は述語的にのみ用いられるとしているが、これは『会話』の用例から判断していると思われる。この点について

『スラヴ』の用例からは、次のように連体修飾格にたつイ語尾形容詞がみられるので、一概にはいえないようである。

アコネコッ (明るくないこと), フチェコッ (扇動する) ((ふといこと), フチェコッユフト (扇動者), コウネコッ (固くないこと) ((強くないこと)), トジェンネコッ (つまらないこと, 淋しいこと)。

(9) 方向を示す助詞サメ, 到達点を示す助詞ドゥイがある (村山氏が指摘)。例を補うと次のようになる。

ドコサメ (何処へ), ココサメ (此処へ), アスコサメ (あそこへ), ドクサメ (何処へ), ディョフォサメ (血方へ), アラケサメ (外へ), ナカサメ (内へ), ウエサメ (上へ), シタサメ (下へ), アトサメ (後ろへ), モスクウイドゥイ (モスクワまで)。

(10) ě と e との区別の問題 (村山氏が指摘)。

『漂流』では、e は ai・oi から変化した音や口蓋化子音の後ろ、半母音 j の後ろに使われるとされている。これに対して、柴田氏は、「ě は子音が口蓋化することを表わし、e は子音が口蓋化しないことを表す⁵⁾」としており、この方が統一的に表記法を解釈できる。

但し、この ě と e との表記の区別には例外がある事を『漂流』で述べており、3例が実例としてあげられているが、これでは資料批判としての、この文献の表記の厳密性がわからないので、改めて『露日』と『スラヴ』の全用例について調べてみると、次のような結果となった。

○ ě の正用例……148例 誤用例……5例 (約3%)

正用例の一部

abáraboně (アバラボネ), akáganě (銅), amázakě (ビール), arakě (外), běci (別なこと), fně (舟), cmě (爪), cúk'ganě (つき鐘), čjugen (馬丁)。

誤用例 (ai・ei 連母音の変化したもの)

kěbo (継母), sakě (境), sakěň (境の), tókě (時計), tokěň (時計の)

○ e の正用例……228例 誤用例……33例 (約13%)

正用例の一部

ábne (ほとんど…でない) ((あぶない), arajě (霰), asáčce (明後日), aske (あそこへ), afe (汗), banmadze (晩まで), ckaměcor (手に持っている) ((つかまえている)。

誤用例 (前に n 子音をもつもの、例えば、nenn・necor などが14例あるのが目立つ。)

čjugen (馬丁) ((中間), bénsaf'ib' (くすり指) ((紅さし指), děklek (主人) ((歴歴), fek' (脊柱), féso (臍), figáre (旱魁) ((日枯れ), fúre (命令) ((触れ), kám'nare (雷), fagetat (禿), juben (小便), témma (ボート) ((伝馬), teoi (負傷) ((手負い), tera (寺), gezo (下女), kefinme (着物を裏返しに)。

これらの例の中には、デンゴボネ (のどぼとけ)・タクセ (多く) のように筆者には正誤例の判断のつかないもの5例は除いてある。

用例の数は、表記の厳密性の評価を考慮して、くり返しあらわれる例についても各々1例と数える事は前にも述べた。ここでは、前掲の čjugen・čjugěn (馬丁) のように同一語でも正誤二様の表記をとるものが若干みられる事を考慮したためである。

- (11) ラ行音は r で表わされているが、6 (6・6月・6年・6000・60・600) の口は lo で表わされる (村山氏が指摘)。

この6の他に、デクレク (主人) 《歴歴》も le として l を用いている例である。

- (12) 共通語のセ・ゼにあたる音節は、シェ・ジェとしてあらわれる (村山氏が指摘)。例を追加して説明する。

アシエ (汗), フシエ (着物のつくろい), カシエスル (助ける) 《加勢する》, カジエ (風), コメミシエ (穀物店) 《米店》, オクイシェンツ (葬式をしないところの), シエ (背), シエビ (滑車) 《せみ》, シェク (祝日) 《節句》, シェク (強く押す) 《急く・塞く》, シェケ (世界), シェマカババ (狭い街路), シェンショナシ (非常に質素な) 《僭上無し》, シェンドウ (船頭), シェンモン (ほんとうに), シェンモト (葱), シェン (干), シェワヤク (心配する), シェワント (傷心の), トジェ (境界) (村), トジェンナカ・トジェンネツ (つまらない・淋しい) 《徒然無い》, ウナジェノケ (豚の剛毛), ウッシェンツ (投げ捨てないところの), ジュサシェン (奴隷化する) 《自由にさせない》など合計50例を数える。

ai 二重母音の縮合によるセはシェとにならないと考えられる。例えば、ニセ (青年) 《二歳, 但し、新背をもとの形とするならば二重母音の縮合とはならない》, ニセウシ (若い牡牛) など。タクセ (多く・…より多く) もシェではない点からすれば、二重母音の縮合形か。なお、

ei 二重母音はカシエスルの例でもわかるように、シェとしてあらわれる。

- (13) i と a とが連続するとき、わたりの j が生じる。例えば、キリヤウ (切りあう) (村山氏が指摘)。

ファイエ (腫れ) などの例にみる r 子音脱落后の je 音については、イエダ (枝)・イエ (画・家) のように語頭にもあらわれることや、現在の薩隅方言にもエ母音自身が強い口蓋性をもっているのも、わたりとしての j が挿入された例ではない。

- (14) 四つ仮名の区別がある (柴田氏が指摘)。

○ジ

アンジルコト (謎) 《案じること》, ツジマキ (旋風), フツジ (羊), フツシノアシ (羊の足), フツジノカワ (羊の皮), フィヨジ (軍人の上着) 《兵士か》, イチファジマイ (最初から) 《一始まり》, イコクジン (大使) 《異国人》, クジラ (鯨), ニジン (人參), サジ (匙), ジ (字), ジカク (書く) 《字書く》, ジミロ (燭台) 《心炉》⁶⁾

○ヂ

ヂ (祖父), チツクイ (農民) 《地作り》, チダ (地), チゴク (地獄), チナカノウミ (地中海), チノト (地の), フェナヂ (鼻血), フィノチゴク (火の地獄), フタヂ (乾燥した土地),

フタヂ (曾祖父), カヂ (舵), カヂ (鍛冶屋), カンヂヤ (鍛冶屋), ミスヂ (身筋), オヂ (叔父), スヂ (筋)

○ズ

コズ (寺男)《小僧》, マズル (混ぜる), スズ (錫), スズメ (雀), スズムシ (こおろぎ), ズウェ (樹枝), カシノズウェ (榿の枝)

○ツ

ツヅ (唾), ツヅ (通訳)《通事か》, チョヅダレ (水盤)《手水盥》, ズモル (どもる), ズモイ (どもり), ズモルコッ (どもること), ズルコッ (出る事), ツク (頂上), コヅミ (堆積), ミヅクルマ (水車), トイツナ (手綱)《取り綱》, ウヅ (深淵)。

語末のジ・チ・ズ・ツの音は、まだ内破音化していなくて母音の無声化の段階ではあるが、表記上は次のように明瞭に区別されている。(一部の語は無声化もしていない)。

○ジ

fcúz (羊), fcúzno af (羊の足), fjóz (軍人の上着)

○ヂ

fanádzi (鼻血), sudz (筋), ftà dzi (乾燥した土地); ftadzi (曾祖父), kádzi' (舵), kadz' (鍛冶屋), mísudz (身筋), ódzi' (叔父)

○ズ

kózu (寺男), súz (錫)

○ヅ

cúdz (唾), cúdz (通訳), údz (深淵)

表記体系として、[z]・[ʒ]・[d] にあたる別々の文字をもっているロシア字であるので、音価も表記通りに、ジ [ʒi]・[ʒi], チ [dzi]・[dzi], ズ [zu]・[zu], ツ [dzu]・[dzu] と観察されていたと考えられる。

(15) カ行合拗音の存在 (柴田氏が指摘)。例を追加する。

ファチグワツ (8月), ゴグワツ (5月), クグワツ (9月), クワシ (糖蜜菓子), クワシユイ (メロン)《菓子瓜か》, クワゴト ナカ (食欲不振), ログワツ (6月), サングワツ (3月), スイクワ (西瓜), ジュグワツ (10月), ニグワツ (2月), シグワツ (4月), シチグワツ (7月), ショグワツ (正月), スグウイ (真直に)。

(16) ui から変化した中舌母音 i が表記されている (柴田氏が指摘)。

村山氏も『スラヴ』の解説中に、篩の語形分布図について説明を加え、当時の i 母音を「18・19世紀の日本の学者にとってはそれを表記するすべがなかったし、表記するすべが知られている現代ではそれは消滅して存在しないのである」として、ui>i>e, i の変化過程をとどめた表記としている。現在の薩隅方言区画内に中舌母音をもっているのは、トカラ列島の小宝島・宝島であるが、これは奄美方言との関連を考えた方がよいであろうし、『日本語地

